

# 3-1

地区の災害リスクと災害対応力を知る・考える

## 住吉区編

### (5) 住吉区防災まち歩き

三田村 宗樹

住吉区の災害リスクについては、すでに紹介したように、上町断層地震による強いゆれ、南海トラフの地震による津波浸水、大和川の氾濫などについて十分に考慮しておく必要があります。

住吉区の防災まち歩きとして2コースを設定してみました。一つは住吉大社を中心として上町台地の西端から住吉区の西部の低地を巡るコース、もう一つは、大阪市立大学から住吉区役所のある沢ノ町を巡る上町台地を中心としたコースです。いずれも歩く距

離として約5kmで、ゆっくりと歩いて、約3時間～3時間半程度のコースとなっています。

#### 住吉大社周辺をめぐる

防災への取り組みには、みんなが暮らしている街を再確認することが大切です。住吉大社周辺を巡りながら、町の歴史とともにたどり、地形や地盤の特徴を理解し、災害との関係も考えましょう。

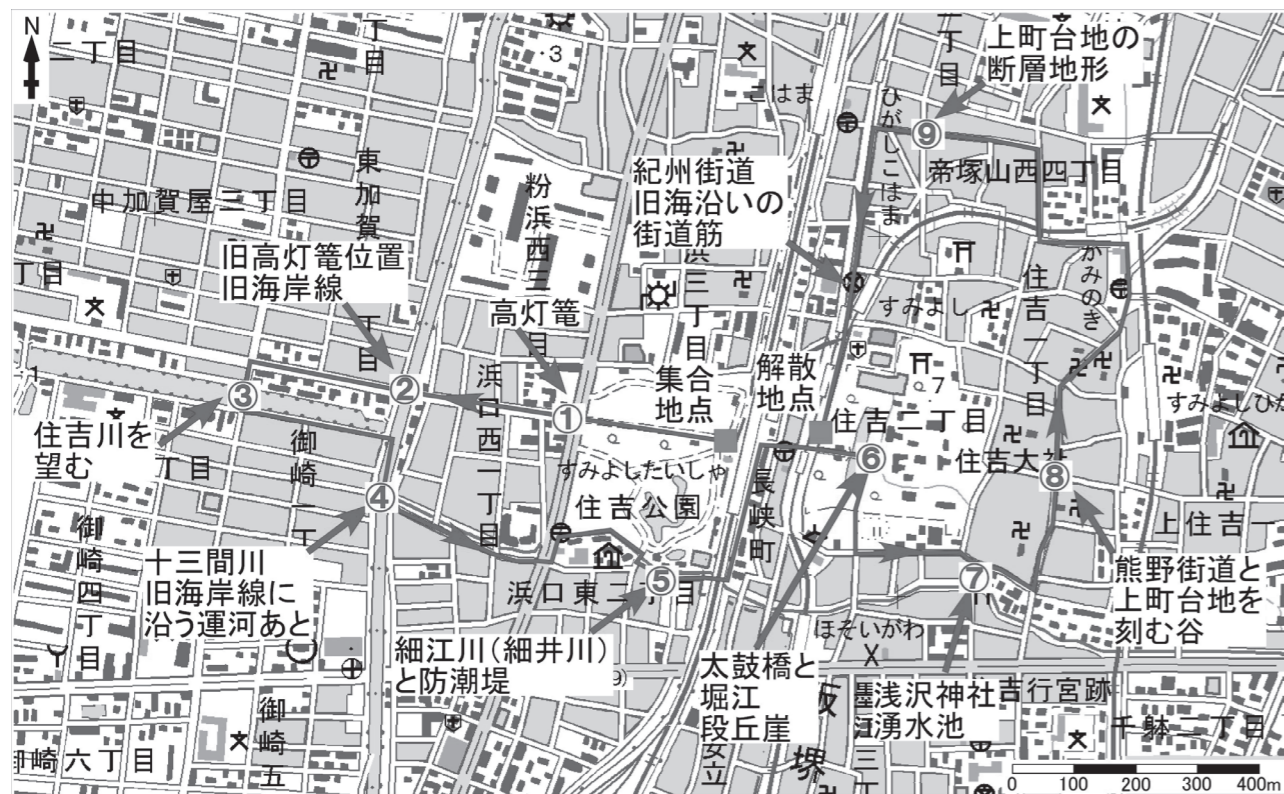


図1 住吉大社周辺の防災まち歩き案内図

住吉公園の中央の通りには住吉周辺の昔のようすを描いた汐掛道顕彰碑 (写真1) があります。住吉大社から海岸に至る表参道の汐掛道が描かれ。高灯籠が十三軒堀川のはとりに建っているのが描かれています。この碑からも、昔、この地域が海岸沿いの地帯であったことがわかります。



写真1  
汐掛道顕彰碑と燈籠



住吉公園を西にむかい、国道26号を渡った場所に高灯籠があります(図1の①、写真1)。住吉大社の旧海岸につくられた常夜灯を再建したものです。本来の高灯籠は約200m西の位置にあり、ジェーン台風などの大きな台風で被害を受け、その後、移設・再建されました。この高灯籠は一般開放されていて、毎月の第1第3日曜日の10時から16時まで高灯籠の内部を見学でき、説明もしてもらえます。本来の高灯籠の位置を示す碑は、現在の高灯籠の位置から西に行ったところに顕彰碑として残されています(図1の②)。この顕彰碑より西側は海岸となっていました。江戸期の新田開発によって埋め立てが進み、陸地となっています。昔の海岸は松原の続く「出見の浜(住吉浦)」と呼ばれていました。春先には潮干狩りで賑わったようです。新田開発で両岸が埋め立てられ現在の住吉川(図1の③)が残されました。現在の阪神高速堺線は、もとあった十三軒間(堀)川の上に建設されてい



写真2  
十三間川と  
住吉大社太鼓橋

ます(図1の④、写真2)。十三間川はかつての干潟を開削してつくられた大和川と木津川を結ぶ南北の運河でした。このような昔の景観から見ても、このあたりが砂地盤で、かつての海岸沿いで低い土地であり、地下水も浅い位置にあることがわかります。このような地盤は地震時に地盤液状化が起こりやすいとみられます。

上町台地には、台地を刻んだ谷がいくつもあります。細井川(細江川)はその一つです(図1の⑤)。現在、細井川は直立した護岸で街中を流れる水路のような状況となっています。かつて、この川の河口域は、住吉津(住吉の細江)として流通拠点でもありました。台地側を浸食して、谷地形をつくり、その川沿いには軟弱な地層が表層にあります。谷沿いに低い土地が広がり、大雨の時には浸水域が広がる可能性があります。

阪堺線沿いに住吉大社にむかきましょう。住吉大社の鳥居をくぐり境内に入っていくと、太鼓橋があります(図1の⑥、写真2)。橋を渡ると数メートル高い場所が住吉大社の社殿となっています。上町台地の端に住吉大社が位置していることがわかります。住吉大社にお参りした後、境内南側にぬけると、住吉大社のお田植え神事をおこなう御田に出ます。この田んぼは

細井川の沖積低地を利用して作られています。

細井川沿いに少し東に向かうと、浅沢神社があります(図1の⑦、写真3)。この社は万葉集に詠まれ、カキツバタ名所であったようです。カキツバタは湿地に茂る植物で、細井川にそう湿地帯の名残でもあります。このような谷沿いの低地は周辺の地盤より軟質な堆積物が分布し、地震の際によく揺れる場所となります。表層が砂層からなっている場合には、地盤液状化の可能性もあります。昔の土地利用は、その土地の地形や地盤の特性を無理なく利用していますので、昔の景観を知ることで、その土地の地盤の特徴がわかります。



写真3  
浅沢神社と熊野街道



細井川の谷を東に進むと上町台地の中央に南北に延びる熊野街道に出ます(図1の⑧、写真3)。街道沿いにかつての面影を残す街並みが随所にみられます。古い街並みで木造家屋も多く、通りの幅も狭いため、建物の耐震性や火災の延焼が起こりやすい地域でもあります。この地域では、火の元に十分注意し、出火した場合には初期消火が大切な地域です。

阪堺電気軌道上町線をぬけて北西の位置にある生根神社に行ってみましょう(図1の⑨、写真4)。生根神社は上町台地の西端に建っています。このあたりは、台地の西側を南北に走る上町断層によって台地側が隆起しており、台地西端はその段差が明瞭で、いくつもの坂道があります。生根神社の正面は階段となっていて、台地の端にあることがわかります。住吉大社の社殿と太鼓橋の間の段差も断層によって隆起した上町台地と低地との境を示しています



写真4 生根神社境内から見た上町台地西端の段差

この地域の街道筋は、台地の上を南北に延びる熊野街道と、台地の西側に沿った浜街道とされる紀州街道があり、現在は阪堺電気軌道阪堺線が走っています。紀州街道沿いは、かつての海岸の名残でもあります。紀州街道に沿って南にむかうと、住吉大社の鳥居が見え、出発点に戻ることができます。

平野の地形は平坦ですが、地盤の違いによって、その地形にも高低差が表れます。軟質で粘土質な湿

地であった地盤は低い土地であり、川沿いの砂地盤である自然堤防などは微高地となっています。まち歩きの際には、緩やかな坂道、高低差を観察し、その場所がかつてどのような場所であったかを考え、古い地図と見比べて、その土地の性状を確認してみることが大切です。

### 大和川のほとりから住吉区役所へ

このコース(図2)は、災害時避難所となっている大阪市立大学杉本キャンパスから上町台地内を歩き、広域避難場所である沢ノ町公園をへて、紀州街道を歩いて大和川のほとりに至る順路で、住宅密集地の状況や鉄道線路が避難の際に障害となる点、避難所の関連施設、災害の履歴の確認などができます。

出発点の大阪市立大学杉本キャンパス(図2の①)は、広域避難場所と災害時避難所となっています(写真5)。キャンパスの南端に位置するグラウンドは救援物資などを運ぶヘリポートとなります。グラウンドの北の端の通路には、マンホールトイレが92基設置されています。キャンパスの東に位置する体育館は災害時避難所とされていて、体育館の隅には手押しポンプの付いた井戸も設置されています(写真5)。平日の日中に大阪市を中心とした地震災害が発生した場合、たくさんの大学生が、キャンパス内に一時的に滞留する状況が生まれます。学生の滞留場所は講義用の教室を活用する予定となっています。周辺市民と大学職員とが協働して体育館に避難所開設することになっていて、その訓練も行われています。



写真5 災害時避難所の大阪市立大体育館(防災井戸)と周辺の道路サイン



背景地図は  
国土地理院地図(電子国土Web)より

図2 大阪市立大学から住吉区役所までの防災まち歩き案内図

杉本キャンパスから北へ向かいましょう、JR杉本町駅から分岐して貨物線跡地(図2の②、写真7)が細長く、街中に空地として残っています。廃線となっているため、地図には鉄道路線としては示されていませんが、細長く現在もフェンスで囲まれ、主要な道路が交差するところだけが通れるようになっています。このような状況は、災害時の避難において障害の一つとなります。貨物線跡地をぬけた北側の地区は道路も細く、木造家屋がたくさん建った地区です(写真6)。この地区は、昔からの集落のあったところで、道路は直線的ではありません。この地区は、火災が発生すると延焼を起こしやすい場所であるといえます。道路沿いに高いブロック塀が両側に作られているところもあり、地震の際にそれらが崩れると、道をふさいで避難が困難となる場合があります。この地区をぬけるとJR阪和線の高架橋(図2の③、写真7)に出ます。線路が高架となっても、その下の土地は、フェンスで囲まれ、駐車場や駐輪場などに利用されているため、高架橋の下を自由に行き来することはできません。先ほどの廃線跡地と同様に災害時の避難における線状の障害となります。高架橋を通り抜けられる広い道路がどこであるかを知っておくことは大切です。



写真7 鉄道廃線敷地と高架橋周辺の状況

JR阪和線の下をくぐって、西側の道路に出ましょう。その道端の電柱には、災害時避難所への方向と距離を示したサインがあります(図2の④、写真8)。比較的広い道路沿いの電柱には、このようなサインが所々に設置されています。この場所の北側には視覚支援学校(写真8)があり、この箇所の電柱サインは視覚支援学校を示したサインとなっています。視覚支援学校の前をとおり、北西方向に向かうと上町台地の地形がわかる場所となります(図2の⑤)。東西の通りに沿って眺めてみると、東に緩やかに下がる地形がわかります。一方、その反対方向の西側は少し急な西への下り坂となっていて、このあたりが台地の西端にあたり、上町台地が東に緩やかに傾いた台地であることがわかります。これは、上町台地の西側に南北に延びる上町断層によって台地がやや傾くように隆起しているためで、上町断層による地表の変形を物語っているとみられています。少し北にむかうと、沢ノ町公園に出ます(図2の⑥)。沢ノ町公園周辺は上町台地を刻んだ谷地形に位置する場所です。このため、沢ノ町公園までの間は下り坂となっていることがわかります。



写真6 家屋密集地の状況  
(コンクリートブロックや道路沿いの老朽化した木造家屋)



写真8  
収容避難所への主要道路沿いサインと収容避難所となっている視覚支援学校



沢ノ町公園もまた広域避難所の一つです。公園の南西側の住吉区役所との間の通路にマンホールトイレが117基設置されています。地下には耐震性貯水槽も埋設されていて、飲料水の確保ができるようになっています。区役所の倉庫には災害備蓄物資として、乾パンやアルファ化米、飲料水、簡易トイレ、毛布などが置かれています。住吉区役所の隣の建物の区民センターでは、大きな災害時にはボランティアセンターも設置されます。沢ノ町公園は広域避難所となっていますので、グラウンドはヘリポートとなり、救援物資などが届けられる拠点となります。

次に、西にむかい阿倍野筋に出て南に行き南海高野線の踏切をわたるとななめ左に交差する道があります。この道は熊野街道です(図2の⑦)。住吉大社までは上町台地上を南北に延びていますが、細江川の谷から南は上町台地の西側の低地に沿って南下します。しばらく歩くと大和川の堤防に出ます(図2の⑧)。ちょうどこのあたりは、上町台地の西の端にあたります。堤防の上流側は、上町台地が江戸時代に難工事の末開削されて大和川が通じた場所です。ちょうどこのあたりの地下に上町断層が延びてくるとみら

れています。これより下流は、高い河川堤防が築かれ、大阪市南西部と堺市北西部を大和川の氾濫から街を守っています。堤防の上には「水防碑」と「堤防安泰祈願の碑」が設置されています(写真10)。水防碑の裏には、なぜここにこの碑があるのかの説明文がありますので見てみましょう。この地点は上流の台地を南に迂回して大和川が低地に出たところで、大きく河道が屈曲しているため、たびたび堤防が崩れ氾濫を繰り返したことから、このような二つの碑が建てられています。このような碑は、この地域の災害リスクを伝える大切なものです。周辺の多くに市民に認知してもらう必要があります。



写真10 大和川右岸の水防碑と堤防安泰祈願の碑